

万延元年の フットボール

——映画文学人生論

原作：大江健三郎（1967年）
参考：『飼育』 原作：大江健三郎
出演：黒人兵：ヒュー・ハード
鷹野一正：三国連太郎
鷹野かつ：沢村貞子
小久保余一：加藤嘉
監督：大島渚
脚本：田村孟
撮影：舎川芳次
音楽：真鍋理一郎

あいまいな日本の私

大江健三郎『万延元年のフットボール』は一九九四年度ノーベル文学賞の対象作品。一九六八年度受賞の川端康成『雪国』とともに国際的に評価された日本文学の代表と目されている。

受賞理由は「詩的想像力により、現実と神話が密接に凝縮された想像の世界をつくりだし、現代における人間の諸相を衝撃的に描いた」。ストックホルムで行われた大江による記念講演のタイトルは「あいまいな日本の私」。

文学とは何かを知るためには、やはり『万延元年のフットボール』も読まなければならぬ。と思つて読みはじめたが、難解な文章で苦勞した。

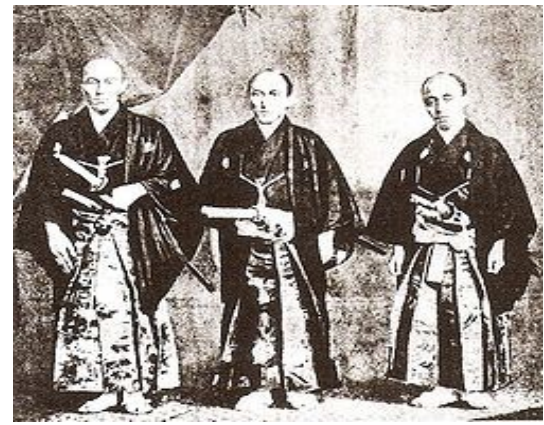
まず題名が内容とどのように関連しているのかわからない。万延元年（1860）は大老井伊直弼が桜田門外で水戸浪士たちに暗殺された年。日米修好条約の批准書交換のため、新見正興を正使、村垣範正を副使、小栗忠順を監察とする遣米使節団が訪米した年でもある。その頃、四国の山奥でフットボールをやっているはずがない。

読みすすんでいけば、フットボールのチームをつくつたのは百年後の村の青年たちということがわかるが、フットボールが小説のテーマというわけでもない。それよりも万延元年の一揆と昭和三十年代の日米安保反対闘争との関連がテーマにながっているようだ。

それにしても、翻訳調の詩的言語で書かれた文

万延元年のフットボール

映画文学人生論



章は読みにくい。おそらくノーベル文学賞の選考委員は英訳で評価したのだろうと思ひ、ジョン・ベスター訳を拾い読みしてみた。

タイトルは、The Silent Cry (『ザ・サイレント・クライ』)、直訳すると『静かな叫び声』。

主人公の根来蜜三郎は二十七歳。アルコール依存症の妻と智慧遅れの子、それに妻が弟と関係して妊娠した子を扶養しなければならぬ。弟は家屋敷を勝手に売払い、村の娘を強姦して、自殺してしまった。弟を自殺に追い込んだのは蜜三郎のせいだと妻からは非難される。

これなら『静かな叫び声』でわかるが、『男はつらいよ』という題名ならさらにわかりやすい。寅さん曰く「あの黒船が浦賀沖に来て以来、日本人はずっと不幸せなんだぞ」「寅次郎春の夢」。

しかし、蜜三郎は寅さんのように怒ったりはしない。「つらいよ」とも言わない。一緒に翻訳の仕事をしていた友人は朱色の塗料で頭と顔を塗りつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこみ、縊死したが、蜜三郎は自殺をしようともしない。

彼は弟に対するヒリヒリするような敗北感の痛みを胸に感じるが、最後には、もう一度やり直したいという妻の提案を受け入れ、人生を出直そうと決意する。蜜三郎は寅さんのような馬鹿ではなく、新しいタイプの聖人君子かもしれない。

亀鳴くや安保一揆の叫び声